

武蔵鑑の諸本

松 浦 公 平

一、武蔵鑑について

武蔵鑑とは「てんなんしょう科の多年生草本、及び、中古武蔵国より製出した鑑、さすがと鑑とを作りつけにしたので、歌にさすがにかけてよむ。云々」と平凡社の大辞典には説明がある。

しかし、ここで取り上げるのは、家康によってその基が築かれ、家光の武断政治を経過して四代將軍家綱の代、幕藩体制もようやく定着し始め、人心も定まり始めた頃、明暦三年（一六五七年）正月十八日から二十日まで昼夜三日間にわたって江戸を焼き尽くした大火の有様を「東海道名所記」や「浮世物語」等で有名な仮名草子作家の浅井了意が著したと伝えられる見聞記「武蔵鑑」である。

作者の浅井了意は、その多くの著作の割には、その人となり、経歴等に不明な点の多い人物である。北条秀雄氏も「仏書、仮名草子其他を合して無慮七十部六百巻にもものぼる歴大な著書、五十年以上にも亘る文筆生活、多彩多様な作品といったものを並べて見、しかも了意の場合その閱歴が今尚はつきりせず、無署名の作品が多く……署名も一定せず、主要作品が殆ど伝了意作である。」（北条秀雄著「浅井了意」三省堂五頁）と述べておられる。

しかしながら「武蔵鑑」については、同氏によれば、了意の作品とされているものの分類のうち「B、大体了意の作と認めうるもの、三部十巻」に入っており、それは「A、確実到了意の作と認めうるもの、十六部百三十三巻」に分類されている「江戸名所記」の「廻向院の条」と完全に一致すること等から判断されたようである。又、水谷不倒氏は、その著「仮名草子研究」（日本文学講座第六巻、江戸時代上編）において、又、藤井乙男氏も、その著「江戸文学叢説」（岩波書店）において浅井了意の項で、共に「武蔵鑑」を両氏それぞれの根拠によつて了意の作

とされている。

日本文学年表（東京堂）によると、明暦三年の江戸大火から明和九年二月、すなわち「武蔵鑑」の再々版が出された頃までの百年足らずの間に十四回も「江戸大火」の箇所が見受けられる。十年に一度は江戸が大火に見舞われたということである。江戸のみならず京都の大火も勘定に加えれば、その倍は優に越したものと思われる。これから考えてみれば、萬治四年三月に「武蔵鑑」の初版が出されてから十九年後の延宝四年正月、九十五年後の明和九年三月というように再版、再々版と板が重ねられた理由もわかるように思われる。

備考

前記の北条秀雄氏の「浅井了意」によると「東海道名所記」が萬治一・二年頃、了意四十一才、「武蔵鑑」は萬治四年、了意四十四才の作、「江戸名所記」は寛文二年五月、了意四十五才の作とされている。

「燕石十種」第一卷（国書刊行会）所収の後見草の序に「古語に後見今亦猶今見古といへり。此頃亀岡石見入道宗山が書置る明暦中火災の記を其むま子伊豫と云るものより借受て……世に行る武蔵鑑といふ物とことにして誠の私記なるもの也。……」とある。ここに言われている「武蔵鑑」であるが、このたび各地に所蔵されている「武蔵鑑」のコピーを収集したところ、その初版だけでも六部、再版、再々版、又、その写本も含めると十四部にも及ぶことから、それはこの板本のことを指しているものと思われる。

二、版本（写本）の所在及び紹介

(A)、萬治四年版

○調査済みのもの

国立国会図書館、静嘉堂、東京教育大学、東京芸術大学、九州大学、大阪市立大学（以上板本）、日本大学武笠

文庫(写本)

紹介

上下二巻、二冊本

題簽「むさしあぶミ 上(下)」

上巻二十丁

丁数
〔下巻二十六丁〕

挿絵、それぞれに地名、寺名、橋名、詞書が四隅や中央に書いてある。

上巻 見開き二枚

〔五丁ウ れいかんし

六丁オ やけ出

〔十四丁ウ なし

十五丁オ 浅草門

片面五枚

二丁ウ 北野天神

八丁オ ほんくわんし

九丁ウ いはひ

十一丁ウ 籠屋

十七丁オ なし

二十丁オ なし

下巻 見開き一枚

十二丁ウ ゑかういん

十三丁オ なし

片面六枚

三丁ウ なし

六丁オ 京はし

九丁ウ もみち山

十五丁オ 大はし

十七丁オ なし

十九丁オ なし

柱刻「むさしあふミ 上(下)」

本文、一面十一行(二丁オは十行)、一行二十字前後、平仮名文で句点濁点が打たれ、漢字にはほとんど全部ルビがふつてある。

刊記 下巻の二十六丁ウに本文より大きな字で「萬治四年丑三月吉日 寺町二条下ル町 中村五兵衛開版」とある。

その他

各段落の区切りは改行によるよりも頁が改められていて、そのために半分以上も空白の丁が、上巻で六枚、下巻で五枚もある。

備考

日本大学武笠文庫本「武蔵鑑」は写本で、三種の版年のもの内、萬治四年版のものではないかと思われる。

(B) 延宝四年版

○調査済みのもの

内閣文庫、国立国会図書館、東北大学狩野文庫、慶応義塾大学（以上板本）、岡山大学池田家文庫（写本）

○未調査のもの

都立日比谷図書館（板本）

紹介

上下二巻、二冊本

題簽「むさしあぶミ 上（下）」

上巻 十一丁

下巻 十七丁

挿絵 詞書が二箇所だけ

上巻 見開き一枚

五丁ウ れいかんし

六丁オ なし

片面二枚

二丁オ こま物うり

九丁オ なし

下巻 見開き一枚

五丁ウ なし

六丁オ なし

片面四枚

二丁オ なし

九丁オ なし

十二丁オ なし

十五丁オ なし

柱刻「むさし 上(下)」

本文 一面十五行(一丁オは上巻下巻ともに十三行)、一行二十四字前後、平仮名文で、句読点は無く、濁点を

打ち、漢字には萬治四年版のものより少ないかルビがふつてある。

刊記 下巻の十七丁ウに本文より大きな字で「延宝四^丙辰^辰 諫月吉辰 山本九左衛門板」とある。

その他

各段落毎に行が改められている。(上巻では一丁ウ、下巻では三丁オ、八丁ウ)

挿絵の人物の位置等、構図が、萬治四年版のそれと大きく相違する。本文も新しく彫られたと思われる。

従って板元により改板が行われたものと思われる。

備考

岡山大学池田家文庫本「武蔵鑑」(写本二種のうち挿絵を含むもの)は延宝四年版に最も近いと思われる。

◎ 明和九年版

○ 調査済みのもの

東北大学齊野文庫、神宮文庫(以上板本)

○ 未調査のもの

都立日比谷図書館(板本)

紹介

上下二巻 二冊本

題簽「むさしあふミ 上(下)」

上巻十一丁

丁数(下巻十七丁)

挿絵 地名の書いてあるもの二枚

上巻 見開き一枚

六丁ウ なし

七丁オ 浅草門

片面二枚

二丁オ 北野天神

九丁ウ なし

下巻 見開き一枚

五丁ウ なし

六丁オ なし

片面四枚

二丁オ なし

九丁ウ なし

十二丁オ なし

十六丁ウ なし

柱刻「むさし 上(下)」

刊記 下巻の十七丁ウに本文より大きな字で「再板 明和九^壬辰 歳春三月吉馬 山本九左衛門 西宮新六版」とある。

備考

明和九年版の刊記には、「山本九左衛門」と「西宮新六」の名前が並べてある。これは、山本九左衛門の延宝四年版に西宮新六が新しく入木をしたということ、それは挿絵や文字の形の相違(部分的)等から容易に理解される。そこで、明和九年版における、明らかに入木されていると思われる部分を、延宝四年版の同じ部分と比較してみたところ、四十五箇所にわたって相違することが判明した。

次にその部分を、萬治四年版の同じ部分と比較してみたところでは二十箇所の相違が見られた。しかし、この内には誤写と思われるものがかなり含まれている。

従つて明和九年版の入木の部分は、延宝四年版よりも、萬治四年版に最も近いと言えるのではなからうか。すなわち、西宮新六は、明和九年版を出す際に、延宝四年版の板木を使用したのが、その磨耗の激しい部分を補修するのに、萬治四年版を参考にして、入木をする板木を彫つたのではなからうか。

又、内容的に影響を与えるほどではないが、他の版年のものには見られない文章や語句が挿入されている所が、かなり見うけられる。特に上巻の十丁ウに至つては、そのはなはだしいもので、二箇所五十三字にわたつて増補が行われている。その理由として考えられるのは、入木を彫る際に、あまり字を小さくし過ぎて、終わりを次の面に引き継ぐには間が空きすぎるので、やむなく二・三行程度の、萬治四年版には無い文章や語句を作つて間にあわせをしたということらしく、西宮新六には何ら深い意図があつたとは考えられない。

入木されている面は、挿絵を除くと、上巻十面（二丁ウ、五丁オ、五丁ウ、六丁オ、七丁ウ、八丁オ、八丁ウ、九丁オ、十丁オ、十丁ウ^{注①}）、下巻六面（九丁オ、十五丁オ、十五丁ウ、十六丁オ、十七丁オ、十七丁ウ）。

挿絵は全部延宝四年版の板木によるものでは無く、新しく彫り直されたものを使つている。又、上巻の二丁オ、六丁ウ、七丁オ、下巻の九丁ウ、十六丁ウの四面は、構圖から見ると大体のところが萬治四年版と同じで、残りの三面は延宝四年版と同じである。

注① 「母もゆきがたなくなりしかバ、ごゝかしこと人をわけてたづねしかどさらに見あたらねバ、今ハさだめて……」
萬治四年版では

「母もゆき方なくなりしかバ、今ハさだめて……」

三、諸本の特色

「板木（写本）の所在及び紹介」の所で、それぞれの板本の特色については言及したので、ここでは各版年の挿絵についてだけ、述べることにする。

萬治四年版、延宝四年版、明和九年版の挿絵を順に並べてみると、萬治四年版には見開き三枚、片面十二枚の挿絵があるが、他の版年のものではないずれもその数が半分近くに減っている。これは板元が、再版、再々版と板を重ねていくにつれて省略してしまっただか、二枚のものを一枚の挿絵に合成してしまっただかという理由によるものである。例えば延宝四年版では見開き二枚、片面六枚の挿絵があるが、その九丁オのごときは明らかに萬治四年版における十一丁ウと十四丁ウ十五丁オの片面一、見開き一の二枚が一つに合成されたものである。

又、それぞれの版年の挿絵を、人物の位置とか人数、炎の形状、絵の向き等の面から比較検討したところ、これらは萬治四年版系と延宝四年版系の二つに分類することができた。

岡山大学池田家文庫本「武蔵鑑」（写本）二種のうち、一方は写本ながら非常に精密な、板本のものに劣らない筆書きの挿絵が七枚含まれているが、右の分類によると明らかにそれらは延宝四年版系であった。

挿絵の分類表

萬治四年版と同じ種類のものには水印を付し、延宝四年版と同じ種類のものには☆印を付した。

萬治四年版	延宝四年版	池田家文庫	明和九年版
上巻	上巻		上巻
二丁ウ水	二丁ウ☆	二丁オ☆	二丁オ水

三丁ウ*	二十丁オ*	十七丁オ*	十五丁オ*	十四丁ウ*	十一丁ウ*	九丁ウ*	八丁オ*	六丁オ	五丁ウ*
二丁オ☆	欠	欠		九丁オ☆		欠	欠	六丁オ	五丁ウ☆
欠	欠	欠		九丁オ☆		欠	欠	六丁オ	五丁ウ☆
二丁オ☆	欠	欠	七丁オ	六丁ウ*	欠	欠	欠	欠	欠
	下卷								

六丁オ米	五丁ウ☆	十二丁オ	五丁ウ☆
	六丁オ☆	十六丁ウ	六丁オ☆
九丁ウ米	欠	欠	欠
十二丁ウ米	十二丁オ☆	二十一丁オ☆	十二丁オ☆
十三丁オ米			
十五丁オ米	欠	欠	欠
十七丁オ米	九丁オ☆	十八丁オ☆	九丁ウ米
十九丁オ米	十五丁オ☆	二十四丁ウ☆	十六丁ウ米

◎萬治四年版の十一丁ウ、十四丁ウ十五丁オの見開き一、片面一の挿絵は、延宝四年版、池田家文庫本では片面一枚のものに合成されているが、明和九年版では元に戻されている。

◎萬治四年版の六丁オの片面一枚の挿絵は、後の版ではすべて見開き一枚の絵に拡大されている。

◎萬治四年版の十二丁ウ十三丁オの見開き一枚の挿絵は、後の版ではすべて片面一枚の絵に縮小されている。

四、岡山大学池田家文庫本の異本について

岡山大学池田家文庫には二種類の写本「武蔵鑑」が所蔵されている。一つの、挿絵を含むものは前述のごとく、延宝四年版の写本であろうと思われる。しかし、もう一方の写本には、同じ「武蔵鑑」と題答は付されているが、中味は前述の流布本「武蔵鑑」とは全く別のものである。しかしながら、これにも内容の一部に「明暦年丁酉 春十八日に神田本郷より火事出来す。云々」とあることから明らかに流布本と同じ、かの明暦三年正月十八日の大火について書いていることがわかるのである。

従ってこれを「武蔵鑑」の異本として取り上げ、それについて述べることにする。

流布本は見聞記に分類されているように、実に克明に、日時、風向き、場所、人名、役職名、石高、金高、人数等が記載されているのだが、異本の方にはそれほど詳細には記載されていない。又、異本の構成は流布本ほどはつきりと上巻下巻に分けられてはいないが、内容から見ると、上の部と下の部に分けられる。

まず上の部では、書き出しの説明「われ一とせ武州江城の辺に旅宿して春秋をくくりける正月中旬のころをひ、おもひのほかなる火難に逢、やうく命のかれて……互にひちを枕とし、時の物がたり、そこはかとなく語居たりけるに……」で始まり、火が接近して大さわぎの江戸城内における將軍家綱や側近達の言動、及び幕府の大火後の始末の備忘録的なものであり、庶民の火事最中の様子を書いた部分は、ほんのわずかに過ぎない。

次に下の部では、大火最中や鎮火後にあった色々なエピソードを七つ取り上げて書いてある。自分の最愛の妻子が自分の目の前で死んでゆくのを見捨て、主君の奥方を救った老臣が、恩賞よりも出家を許してくれるように主君に頼むものや、ある大身の旗本の大金持の隠居が、火事をさいわいに大儲けしようと米を買い占めたが、將軍による蔵米の放出で結局は大損をしてしまい、世の物笑いの種となってしまうものや、貧乏人の親子による善行等であ

る。それらの後にはそれぞれ筆者による教訓めいた言葉が付されている。例えば「扱いまめかしき御事なれども、恐れつゝしむべきもの、はなれてはなれたきものはよくの道也」という書出しで始まり、「鹿をおふりやうし大山を見ずといふ事まことなるかな」「とふるふせみをねらへば野鳥是をうかゞひれうしのためにころさるゝをしらずとも、かやうのことなるべし」、「是皆欲の身をほろぼす所にあらずや、又いのちをたすくもかね、はぢをかくも金也」、「又世にはなさけなきぶ道人こそあれ」、「かへすがへす、なに事も人は知まじきと思ふ心をかんやうにかくごすべし。たゞよく色欲の道ほど人をがひする事はなし。つゝしみ恐るべし」、「なをもしんじんにいり、かみをも念じ、あがめたつとむべきものなり」、「天に口なし、人を以いはせよといふ事まことなるかな」で終わっている。流布本が鴨長明の方丈記を模倣しているとはしばしば言われることであるが、これらの言葉から考えると、異本は方丈記の仏教の無常観というよりも、むしろ儒教的道徳的な教訓に重点が置かれているようである。

次に筆者についてであるが、「四つの海、浪しづかに、吹風も枝をならさず、降雨つちくれをうごかさず。たゞ戸ざしをわすれたり。誠に万民のしたがりたる事は草にかぜをくはふるがごとし」とか「天下の武将源朝臣征夷大將軍新田家康公四代の孫征夷大將軍家綱公の御世に至りて天下いよくとくにきし、しよこう万民のつきしたがひたてまつる事は、ほくしんにしうせいのみかふるがごとし」、「將軍いささか御おどろきあてばざれたる御気色もなく」、「かく有がたき御説かなとて皆一どうにかんじたてまつる」、「さて火事一ばんにはせさんずる大名には」、「將軍其夜ハ御西の丸に御座なさせられ」等々の言葉から、これは何か幕府とかかわりのある人間によるものではないかと思われる。

五、活字本、複製本

活字本としては、明治二十四年出版の東京博文館発行の「近古文芸温知叢書」第十一編所収のもの、昭和四年八

月出版の日本随筆大成刊行会発行の「日本随筆大成」第三期第三卷所収のもの、複製本は「古板地誌叢書」（昭和四十五年）だけである。これらには全て萬治四年版を載せていて、例えば「日本随筆大成」の方に「その挿図は当時の状況を画きたるものにて本文と相俟って考証の資料たるべし。奥付には『萬治四年丑三月吉日 寺町二条下ル町中村五兵衛開板』とあり、その後、明和九年に再板せり。書表に温知叢書に収めたり。」とある。従って延宝四年版版については知られなかったようである。

又、今度、大阪市立大学蔵の萬治四年版と「日本随筆大成」と「温知叢書」のものを比較したところ、五十五箇所にのぼる誤字や欠落が発見された。両書の誤字や欠落がほとんど一致することから、「日本随筆大成」は原本に依つたものではなく「温知叢書」を引き写したものである。又、更に引き写しの過程でも誤りが発見された。

次に「日本随筆大成」の誤りと、正しいものを挙げておく。（特に著しいもの）

729頁1(調)所のゆくかたにしたがひ
(正)心のゆくかたにしたがひ

734頁1(誤)いく千百とも数しらず
(正)いく千万とも数しらず

739頁1(誤)至るまで百廿ヶ寺
(正)至るまで百六十ヶ寺

742頁1(誤)はしるもありこれはくといふ

②はしるもありあるひは屋のうへにあがりてにぐるもありこれはくといふ

742 頁114 ②誤 下やしき以上九ヶ所

①正 下やしき以上十九ヶ所

755 頁110 ②誤 本誓寺薬師寺

①正 本誓寺典学院吉祥寺金剛院弥勒院大竜寺仏光寺薬師寺

761 頁116 ②誤 きゝ給へ、それがし十八日の

①正 きゝ給へ、それがしことのほかなるめんぼくをうしなひたると申へ此折からの事なり。とてもものに語りてきかせ侍らん。それがし十八日の

以上のような次第であるから、萬治四年版の原本による翻刻が必要と思われる。異本の内容は全く世に知られていないので、これの翻刻の準備を進めている。

(本学十九回卒業、岡山県立勝山高校教諭)